



戦場の祈り

早稲田佐賀中学校 3年

板垣 仁菜

やつぱり熱がある。学校が休みになつて一ヶ月。外出もしていない。喘息の弟がいるから、感染には十分注意していた、つもりだつた。私は手が震えた。味はする？頭が真っ白になつた。誰に相談しよう。そう、もう一月、母は家に戻つていないのでから。

私の手元には母の遺書がある。何かあつた時の連絡先が書いてある。いつ用意したのか、数年先の私の成人式の着物の受け取り場所まで書かれていた。母に会えるだろうか？家族にうつせば、大好きな笑顔は奪われるだろう。弟は本当に乗り切れないかもしれない。大きく鳴る心音が鼓膜を揺らし、痛みすら感じじる。恐怖で手が震えた。自分を恐ろしく思つた。次々と恐怖の波は襲つてくる。私は、母が感じた恐怖を実感した。

呼び出し音が三回鳴る前に、懐かしい声が聞こえた。いつも私の電話はすぐによつてくれるから、私は邪魔しないようにしていた。「私、熱があつて。」いきなり電話が切れたが、四十分後に、母が白衣姿で家に現れた。母はすぐに私を車で自分の病院に連れ、診察をしてくれた。熱がある私を母の職場は嫌がるのではないかと心配したが、皆が温かく声をかけてくれた。結

果を待つていると、不安そうな面持ちの人気が診察室に呼ばれては、しばらくすると安堵した表情で出てくる。幸い私は新型コロナウイルス感染ではなかつたが、そうであつてもそうでなくとも、母達医療者には関係ない。彼らは最前線にいて、自分の恐怖の壁を乗り越え、人々の不安へ手を差し伸べている。母は、家族を守るために、誰かの大切な家族を守るために、自宅に帰らない方がよい、と泣きながら遺書をくれた。私は自分を躊躇なく迎えてくれた医療者の笑顔を生涯忘れるはないだろう。恐怖や不安は誰かを差別しても解決しない。まやかしだ。皆で心の恐怖の壁を乗り越え、医療者への差別をやめ、強くなろう。そう、明日救われるのは自分かもしれないのだから。

(審査評) 板垣さんの文章は、自身の体調の変化から生まれる疑心的な心境とコロナウイルスが作り出す社会の現状との間に表れる複雑な気持ちを上手く表現している素晴らしい作品でした。文中に表れる表現が読者の頭の中に一コマ一コマのシーンを彷彿させること。それが、緊張感と臨場感を伝える言葉選びから構成されていて感銘を受けました。そして、最後の「恐怖や不安は誰かを差別しても解決しない。」という言葉には、如何なる時も己が強くならなければどんな状況も乗り越えられないという強い意志が現れているところも非常に印象深い。

(柿本遼平)